
学部この一年

環境生態学科この一年

環境生態学科主任 荻野和彦

2月24日、本年度の卒業研究発表会がおわった。一般に卒論発表会と呼ばれているこの行事は、23名の諸君がひとり15分づつの持ち時間をいっぱい使って、たいへんに緊張する時をすごした。今年度の卒業生は二期生であるから、環境生態学科にとっては2回目の卒論発表会であった。

この行事を単に卒論の発表とすることに疑義を挟む向きがある。学生が提出した論文によって、その学生が卒業研究をきちんとやったかどうか、滋賀県立大学を卒業させるに値する研究を残したかどうかを判定する必要がある。卒論発表は卒論の公開審査の場と考えるべきだということである。学士の称号が学位として扱われるようになって、学位審査を必要とするという考え方にたてば、この考え方は妥当であるように思える。学位審査のやり方は非公開で審査委員会によって行う方法、審査委員を交えた一般の場で公開で行う方法、両者を併用する方法などがある。どのような方法によるにしても学位審査という手続きは必要である。このような学位審査の場とすれば、卒論発表会を学会発表と同列に並べることはできない。卒論発表において指導教員はもっとも手ごわい審査者であるが、学会発表ではもっとも頼りになる共同研究者になるのだから。

卒業式が学位授与式と呼ばれるようになって、諸大学でこの考え方が定着してきたように見える。

卒論のテーマ

卒論のテーマはどれも、それぞれに個性豊かな、興味深いものばかりであった。23のテーマのすべてについて、詳しく述べることはできないが、おおづかみな内容によって分けると、

地形、大気・水循環を扱ったものが4篇、

琵琶湖のプランクトンなど、水生生物が2篇、陸水環境の生物地球化学過程が3篇、環境の微量化合物の化学分析法が2篇、陸水環境管理にかかる諸過程が3篇、動植物の季節相、群集動態、種間関係、環境資源利用が9篇であった。環境生態学の場の広がり、手法の幅を読みとることができる。

卒論テーマの決め方、決まり方

環境生態学科では三回生の後期に研究室に所属する。フィールドワークをはじめ、実験、調査、観察(測)、ゼミなど各研究室の研究活動に直接触れ、研究テーマ、研究手法を知る機会が多くなる。こうした研究室活動のなかから卒論のテーマが、自主的に決まることが期待されるし、それがもっとも望ましい。雪の研究や植物の開葉、シュートの伸長など冬や春の季節に関係ある現象に関心が向いたら、早くに測定法なども習得しておかなければならない。早くにテーマを決め、調査研究に取り組んだ人たちは研究の完成度が高いという評価を得たのは当然である。

一方、「自主性」に任せておくと、なかなか決まらずに「ああでもない、こうでもない」と迷い出す人がいる。「自分はこれをやるんだ」と決めて込んでしまう人がいる。「大きすぎる風呂敷」を広げてまとまりのつかなくなる人、「小さな袋小路」に入りこんで出口の見つからなくなる人など、いずれもはまりやすい罠だといってよい。そんな時、頼りになるのが先輩としての大学院生の助言だろう。

迷いに迷って決め兼ねている人には、ポンと背中を押してやるようなことも必要になる。何人かの人がそのような経験をしたはずである。

取り組み

研究計画ができあがると観察(測)、実験と具体的な調査活動にとりかかる。野外作業が多いテ

ーマ、試料を持ち込んで実験室での作業が主となるテーマなど、調査研究活動の様態はさまざまである。持ち帰った試料はすぐに処理しなければならなかったり、ある程度まとめて処理するほうが能率がよい場合があったりする。もっとも厄介なのはすぐに処理しなくてはならないのに、まとめたほうがよいことにして、手順を先送りするケースである。季節相の調査をしていると試料はどんどん溜まる。実験室の中には持ち込んだ試料の山が築きあげられることになる。

あわてて乾燥器の温度を上げ過ぎて、試料を焦がしたり、焼いてしまっただけで元も子もない。抽出をする時には収量を確認しておかないと必要なものがちゃんと採れていないことが、後でわかったりする。

「試料は適切にすばやく処理してデータにする」のが鉄則である。

まとめる

いよいよ卒論にとりかかる。観察(測)結果、実験結果などがデータとして出てくるとデータをもとに研究の進捗状況をチェックすることができるようになる。最初は結果だけしか見えないかもしれない。しかしテーマの目的を実現するために採った方法が適切であったかどうか、十分なデータが取れているかどうか、検討を進めていくうちに自分の研究の全体像が見えてくるようになる。

自分が取り組んでいる現象がどのような要素から成り立ち、それらがどのように組み合わせられているのか、舞台装置を検討し、登場人物を考え、シナリオを組み立てていくのである。目的は、方法は、結果はとんでも問うていると、自分は何をどこまで明らかにしたのか、だんだん見通しが利くようになってくる。「あっ、そうか」、「あっ、わかった」という声を発するのは個々のデータの羅列的な集積だったものを咀嚼して卒論にまで高

めることのできた者の味わう醍醐味であるといえよう。研究室の中でそんな声上がるのを聞くのはほんとうに感動的である。

「卒論にはシナリオの書き手が要る」のである。卒論発表

インスブルック大学のラルヒャ - 教授がこんなことを言ったことがある。学生が研究をまとめて、論文に仕上げた時、「君の研究成果を1枚の図で表現するとどうなるかね？」と尋ねるのだという。論文の中にはすでに何枚ものグラフが描かれているし、いくつもの表になってデータが示されているのである。学生にとって真意がよくわからないこんな質問をする先生は意地悪だとその時は思った。

しかし卒論がよくできていればいるほど、つまり目的は？ 方法は？ 結果は？ となんども自問し、十分な考察ができていると、結論は意外に簡明直截なものであることが多い。ラルヒャ - 先生の問いはそんなに無理難題を吹っかけているのではないことがわかってくる。

卒論発表会は冒頭にも述べたように、ひとりあたり発表12分、質疑応答3分の合計15分間であった。12分間の発表の中に卒論で扱ったすべてを盛り込むことはできない。卒論がねらいとしたこと、それがどこまで達成できているかを問う必要がある。その検討結果を適切な枚数の資料にして、聴衆に提示し、理解してもらわなければならない。

「発表するのは珠玉のようなエッセンス」だけなのである。持続的に維持してきた緊張感、まがい物でない自分の作品を作り上げたという達成感、そんなところに基準を置いて二期生諸君の卒業研究をみると、「きわめて優れていた」ということができる。

坂本 充

ミシガン州立大学連合との学術交流を目指して

環境科学部では、環境問題解決に必要な環境について総合的視野を備えた人材を育成するため、環境フィールドワークなど現場教育に重点を置いた教育を進めている。この環境教育を進めるにあたり重要なポイントは、環境問題は自然と人間社会の絡み合いの問題であり、地域によって問題は異なり、対応も対策も異なることである。この理由から環境フィールドワークでは、出来るだけ多様なフィールドを選び、学生に問題の多様性を理解させる様に努めている。現在、環境問題は広域化し、国際的な政治、経済、資源、人口問題がわが国の環境問題と密接に結びついている。環境問題により広い視点から対処して行くには、環境の教育と研究の国際化をはかり、学生と教員の海外研修を促進するとともに、海外の学生と研究者を招き、国際的視点から環境問題の理解を深める必要がある。

幸い滋賀県はミシガン州と姉妹関係にあり、彦根市松原のJCMU(ミシガン州立大学連合日本センター)で、米国学生に日本語と日本文化の教育を進めている。この関係を基礎に現在3つの学術交流が検討されている。何れも環境科学と密接な関連があり、私は平成10年12月、11年8月、12月の3回にわたりミシガン州の複数大学を訪問して話し合いを行い、より良い交流関係が確立する様に努めている。

その一つが、本年8月に本学交流センターで開催予定の「自然と調和した地域社会実現のための湖・集水域生態系の保全と管理」の滋賀県立大学・ミシガン州立大学連合共催の環境シンポジウムである。水資源として重要な湖を抱える滋賀県とミシガン州は、集水域における人口増加と産業活動に原因する湖沼環境の劣化に悩まされており、その保全と管理が共通課題となっている。シンポジウムでは、湖沼の保全をめぐる滋賀とミシガンの共通課題の討論を通じて、環境保全と管理の進歩に必要な課題を明確にするとともに、重要課題について国際共同研究を目指している。企画運営は、学部選出委員等があたるが、このシンポジウムが国際共同研究等国際交流の促進につながる事を期待している。

第2の交流事業は、LSSU(スペリオール湖州立大学)教員による滋賀県立大学学生への野外特別実習である。1年前にLSSUより提案され、経費、期間等の実習実行条件について交渉を続けてきた。本年2月LSSUより、従来の県立大学生のミシガン夏季訪問事業に近い案が提示され、前向きな検討を進めている。海外実習における外国の自然環境や産業、工業の実地演習は、学生が環境についての国際的視野を広げるに極めて有効な機会であり、国内教育のみで学べない大きな効果が期待されている。

第3の学術交流計画は、彦根JCMUの米国学生に日本の環境問題を学ばせるEnvironmental Studies in Japanプログラムである。事業計画の詳細は決まっていが、計画では、本年秋からJCMUで環境の教育を受けた学生が、来年春から2ヶ月ほど、環境科学部や県内の環境研究機関で行われている環境研究を実地に勉強するという。この計画への対処と実行に向け大学、学部、JCMU間の密接な協議が進められている。

安野 正之

1999年

5月 OECD環境影響評価の生物試験法の国際会議出席

6月 OECD化学物質のリスク評価の第9回会議出席

10月 国際生物学連合の生物指標に関する会議出席

11月 SCOPE 環境評価手法委員会出席

12月 国際水学会エコハザード会議出席

12月 第2回内分泌攪乱物質国際会議出席

2000年

3月 OECD化学物質のリスク評価の第10回会議

3月 メダカ国際会議

これ以外に9月にダイオキシン会議がベニスであり、その際に行うChemosphereの編集者会議に来るよう要請されたが出席できなかった。11月末にはバンコックでの環境会議に際して開くSETAC ASIA/PASIFICの会議への出席要請もあったが、とても余裕がなかった。

丸尾 雅啓

1999年度の主な活動：5月25日～27日：琵琶湖48時間連続観測。中山教授、村瀬助手ほかと共に昨年同様、実習船「はっさか」、生態学研究センター「はす」両船による4時間おきの採水を行い、陸上にてただちに栄養塩、主成分イオンの分析を行った。昨年の夏との違いがどう出たかが楽しみである。6月12日：陸水学100年記念行事・日本陸水学会近畿支部会主催の琵琶湖一斉調査。三田村教授ほかと「はっさか」にて、琵琶湖北湖の試料を採取、他機関とデータを交換し琵琶湖表層全体の水質がどのように変化しているかを調査した。6月25日～7月11日：東京大学海洋観測船「白鳳丸」KH99-3次航海に参加、東京晴海埠頭よりアラスカ州コディアック島まで、北太平洋、ベーリング海を航海。試料採取、現場測定により、アンモニア、マンガンなどの濃度分布、変化を観測した。現場測定用のアンモニア蛍光分析計を用い、今回は深層水の10nMレベルでのアンモニアの定量が可能となった。8月3日～7日：京都大学瀬戸臨海実験所にて自然環境特別実習(海洋実習)。沖で船が揺れたため、久しぶりに小船での酔いを経験した。9月7日：日本分析化学会第48年会敷設若手シンポジウムにて発表：「雪氷・陸水・海水の微量アンモニア分析」。10月8日～11日：第64回日本陸水学会彦根大会：ご当地滋賀県立大学にて開催。発表は大学院環境科学研究科第一期生におまかせ。予想をはるかに上回る参加者で、要旨集在庫がピンチに。坂本充実行委員長、倉茂好匡事務局長はじめ委員のみなさまお疲れ様でした。11月16日～19日：三重県五ヶ所湾沖に敷設された波力発電施設「マイティホエール」上にて、中山教授らと共に、現場型栄養塩連続測定装置の試運転。一部の装置はそのまま連続運転に入り、12月9日まで連続測定を行った。いずれこの実験を基に、太平洋上に自動観測ステーションを構築する計画が進行している。2000年2月25日：丸善から「はかってなんぼ - 分析化学入門 -」出版(第13章執筆担当)。あっというまに2000年。

村瀬 潤

「2000年問題」に思う

新ミレニアムを迎えるにあたって我が家もマスコミやスーパーの仰せのとおり「2000年問題」にそれなりの備えをしました。飲料水、非常食、乾電池、カセットボンベ、さらには原発誤作動による放射能漏れ対策のヨウ素の錠剤まで……。結局元旦に環境科学部棟に入るためのカードキーが使用不可能になったことぐらい(これも本当に2000年問題であったかどうかはわからない)で、身近で問題らしき問題は起きなかったわけですが、いろいろと考えるよい機会でした。

愕然としたのは、自分がいかに社会システムに「生かされているか」ということでした。総理大臣は「念のため数日分の食料等生活必需品の確保を」と言っていました。しかし、居食住に関わるすべてを自

分の関与できないシステムに依存している現在、万一深刻な「2000年問題」が長期にわたって継続した場合、私は自身の力で生きることすらできないのです。これは実はかなり危ういことだと改めて気づきました。

もう1つあきれてしまったのは、その社会システムについて自分が全くと言っていいほど知らないということです。どの程度安定なのか？どの程度信頼できるのか？あるいはどの程度リスクを覚悟しておかなければならないのか？……「環境を科学する」ことで生活している人間が自分の身の回りすら認識できていないとは……。反省することしきりでした。正月休みには学生時代に読んだ「パパラギ」を久しぶりに開きました。

それにしても私以外に同様の思いをされた人は少なくないと想像するのですが、「2000年問題」の総括として話題に上ることがないのは何故なのでしょう？

荻野和彦

生物多様性条約が見せた一面

生物多様性条約は目的の第一に「保全」が、つづいて「持続的利用」が、そして最後に「遺伝資源利用にかかる利益の衡平、公正な配分」が謳われている。生物研究者の多くはこれを読んで、ワシントン条約やラムサール条約のように生物多様性の保全のための条約だと思っている。種、生態系、遺伝子の保全のための生物多様性の研究がようやく脚光を浴びることになったと考えている。

そうではないのだ。目的の2番目に書かれているように、これは生物資源の利用条約であり、利益配分のための経済条約なのである。生物研究者でこのことに気づいている人は皆無といってよい。

数年前、フィリピン政府は大統領令247号を発し、生物資源研究を国家の厳重な管理下におくことにした。生物研究は生物資源利用の基礎であるから、生物資源研究と重なり合うところが多い。研究規制は生物研究にまで及ぶことになった。生物研究を止めたら、資源研究も止まってしまう。フィリピン方式は賢明ではないと思ったが、タイやマレーシアの政府高官は「われわれの考え方はフィリピンに近い」と言っていた。

昨年8月、サラワク州政府の生物多様性センターが活動を始めたと伝えられた。新規の生物研究は許可申請しなければならないし、標本の持ち出しは禁止する、ただし現在進行中の計画には生物多様性研究を除いて適用しないという。われわれの研究は1992年から森林局と共同で始めた「長期生態観察」と「生態系修復」のための研究だから、この規制の対象にはならないはずだ。が、現地にいる大学院生たちは異口同音に「生物多様性の研究をしています」と言った。「えっ」、耳を疑った。せめて新聞記事と自分の研究を結びつけて考えるくらいの社会性を期待したいのだが。

國松孝男

教育 本年度から新カリキュラムになり、学部では「環境化学」(2回生)と「水環境管理学」(3回生)を、大学院では「物質循環論」と「集水域環境論」を講義し、京都府立大学人間環境学部環境情報科学科では「水質保全論」を集中で講義した。専攻学生には次の研究テーマを与えた。

[大学院修士] 井上大祐(ヒノキ造林地と落葉広葉樹二次林の水質形成機構の比較) [卒業論文] 泉浩二(林地流出水の栄養塩負荷がダム湖水質に与える影響)、鬼頭雅司(酸性降下物の湖沼水質と森林土壌に与

える影響) 宮野奈穂子(森林伐採による硝酸態窒素の上昇とその回復機構) [環境フィールドワーク] 津村絵里子(林地の地質と水質)

研究 バンコックで2000年1月16～22日に開催された国際水学会(IWA)のDiffuse Pollutionに関する国際学会で、Characteristics and estimation of nutrient loading from a mountainous basin forested by Japanese cypress について発表し、地下水汚染セッションのチェアマンをつとめた。学会後、地質と山地流出水の水質に関する研究を世界規模へ展開するため、一昨年のイギリス湖水地方カンブリア山脈に続いて、ネパール中西部のチトワン国立公園からアンナブルナ山麓にかけて山地流出水とダム湖水を採水した。国内での学会発表は10月9～11日に我が校で開催された日本陸水学会第64回大会で井上、宮野、國松が発表し、2000年3月16～18日に京大で開かれる日本水環境学会第34回年会では泉と鬼頭が、その少し前の3月11日には再び宮野が大阪電気通信大学で開催される日本水学会近畿支部第11回研究会で発表する予定である。

学内外との協同研究は、住友財団から「高硝酸塩流出林地の分布と列島地層との関係」(國松代表)のテーマで研究助成を受け、琵琶湖研究所との「森林伐採の影響」および森林センターとの「ヒノキ林における水質形成機構」についての協同研究は本年も続けた。2000年2月9日には琵琶湖研究所で第18回琵琶湖研究シンポジウム「森林伐採が環境に及ぼす影響」を開催し、研究成果を発表した。

社会活動 環境庁水質保全局水質管理課と日本水環境学会による「湖沼環境保全対策技術検討委員会」、建設省近畿地方建設局による「近畿地方ダム等及び琵琶湖管理フォローアップ委員会」、琵琶湖・淀川水質保全機構による「面源負荷削減対策委員会」、水資源開発公団丹生ダム建設所による「丹生ダム生態系保全検討委員会」の各委員を勤めた。

論文

- 1) Kunimatsu T., Sudo M., Hamabata E. and Kawachi T. (2000) Characteristics and estimation of nutrient loading from a mountainous basin forested by Japanese cypress, Proceeding of 4th International Conference of Diffuse Pollution at Bangkok, Thailand, pp. 299-306.
- 2) Kunimatsu T., Sudo M. and Kawachi T. (1999) Loading rates of nutrients dischargeing from a golf course and a neighbouring forested basin, Water Science & Technology, 39 (12), pp. 99-107.
- 3) 國松孝男 (1999) 農村地域の汚濁負荷の特徴とその削減、環境技術、28、pp. 29-37.

著書

- 1) 「琵琶湖の水環境」(宗宮 功編著) 2-1琵琶湖と森林、2-2農地、3-1琵琶湖の水収支、pp.19-27、39-45、95-99、技法堂出版(2000)
- 2) 「日本の水環境 - 近畿編」(関西日本水環境学会編) 3.2.2近畿におけるディフューズポリューションと水質管理、pp.84-90、技法堂出版(2000)
- 3) 「改訂 地下水ハンドブック」(改訂地下水ハンドブック編集委員会編) 第10章 土壌による汚水の浄化、pp.1273-1303、建設産業調査会(1999)

野間直彦

3月と5月にタイのカオヤイ国立公園へ行き、サイチョウの巣の調査をした。サイチョウの雌は子育てのとき樹洞の巣にこもる習性を持っている。嘴が出る穴を残して入口をふさぎ、外敵が入れないようにして約3ヶ月間外に出てこない。その間雄が雌と雛鳥たちの餌を運ぶ。巣穴を見通せる場所にブラインドを

張り、そこで夜明けから日暮れまで、雄がやってくる度に餌を吐き出して与えるところを見て、何をどれだけ与えているか調査した。餌には昆虫やトカゲも混じるが多くは木の実だ。雌は、実の中の種子を、吐き出したり糞と一緒に穴から外に捨てる。だから巣穴のある木の根元にはたくさんの種子が散らばっていて、やがて芽を出す。それが種子散布にどれだけ影響しているかを知るのがこの調査の目的だ。カオヤイには4種のサイチョウがいるが、4種それぞれの給餌の間隔・餌の内容・量が比較でき興味深かった。

屋久島では98年から99年にかけての冬、照葉樹林の木の実の数は不作で、調査を始めた88年以来最低だった。それが過ぎた春先、調査地のサルが大量に死亡し、群れが消えるという事件を共同研究者が目撃した。餌が足りずに栄養不良だったところに病気が襲ったらしい。このようなことは、冬でも木の実が多く常緑の葉もある南のサルでは起きないと言われていたのだが、そうではなかった。また屋久島ではオープンフィールド博物館構想というものに関わっている。これは私達の側からは、研究の成果を島の振興に生かすための事業なのだが、そのひとつとしてインターネットのホームページ上に「バーチャル博物館」を開いた（<http://www.dab.hi-ho.ne.jp/yakuofm/>）、今後内容の充実につとめたい。夏休みには、研究者と地元の人が講師になって「屋久島フィールドワーク講座」を開き、各地から参加した15人の学生と実習をおこなった。こちらも毎年続ける予定でいる。

秋には、県立大学で学生たちが企画した「炭焼き」の責任者になってほしいといわれ、一緒にやることになった。これは、管理が放棄されて猛威をふるっている竹を切って資源として生かそうという試みの一環である。琵琶湖に注ぐ川の堤防やその回りは、外から見ると木がある普通の林のようだが、中に入るとものすごい竹やぶになっているところが多い。小さな植物は生きていけず、動物相も単純になっている。伐ることで林を取り戻し、材は炭にして水の浄化などに役立てようというものだ。彦根県事務所林業課の協力で、犬上川河畔の竹やぶから600kgのマダケを切ってきて、県森林センターから借りてきた移動式の炭竈に詰めて火入れ。テントに泊まりこみ火の番をした。3日目の明け方、煙の温度が上がり透明になったので竈を密閉。約100kgの炭がとれた。新聞が宣伝してくれたおかげもあって、竈出しには学生だけでなく近所の人達も集まり、皆大喜びで持って帰っていった。あとで考えてみると、竹炭は水の浄化・炊飯用などに人気が出て、10kgの卸値が約1万円で取引されている。ということは100kgで10万円分も、気前よく配ってしまったことになる。だから皆さんあんなに笑顔だったのだ。

本の分担執筆：以下の3冊に、動物による種子散布の話を書いた。

上田恵介編『種子散布 助けあいの進化論』- 1巻【鳥が運ぶ種子】、2巻【動物たちがつくる森】(築地書館)

高畑由起夫・山極寿一編『ニホンザルの自然社会 エコミュージアムとしての屋久島』(京都大学学術出版会)

肥田嘉文

県立大学に赴任してちょうど1年になる。次々とはじめての問題にぶつかる毎日は、ハードだったが楽しく、やりがいを感じるものだった。また文字通り、学生と生活を共にした、1年でもあった。

私は大学院の博士課程をわずか2ヶ月残して、中退という形でこちらに来た。おかげで長年暮らした京都を去るというのに感傷に浸っている間もなく新たな生活が始まってしまった……。私が職に就くのはこれが2度目である。初日に大学に出向いて、諸々の事務手続きの説明を聞いていて、また一社会人として扱われる立場に戻れたことがうれしかった。

研究室内で実験をするこれまでの研究から、こちらに来てからの野外調査は非常に新鮮だった。10年ほ

ど続いたペーパードライバー歴にも終止符を打ち、早速2月下旬から運転の練習を始めて、3月には車で調査地に出かけるようになった。この1年は新しい論文を読んで情報を収集したり、研究の題材になりそうなことを探してみたりといったことを継続的にすることができなかった。この点は素直に反省している。しかし、年間を通じて野外に出て、とにかくそこで目にするものを観察してきたことで、琵琶湖集水域をフィールドとして研究していくモチベーションは高めることができたと感じている。来年度は、野外調査を始めた頃の新鮮な気持ちを忘れずにフィールドに出て、また、自分の研究テーマを決められるようにしたい。

最後に、今年の心残りを1つ。それは「自然環境特別実習」が実施できなかったことである。私が教員の1人として担当したテーマに希望学生がいなかったのが理由である。伊香郡余呉町摺墨には、県立大学が所有する「集水域実験施設」という施設がある。ここの森林実験流域において、溪流による物質の流出を地質・流量・水質という観点から調べることをテーマとする実習であった。今年度はここで卒論研究をした学生も2名いて、この流域には非常に興味深い特徴があることもわかってきた。来年度こそ、ぜひ学生の希望者が出てくれることを願っている。私は個人的に大いに期待し、楽しみにしている。

伏見碩二

変動の時代

今年度もまた、世界各地で巨大地震や台風の異常地象・気象が頻発し、都市でも山地でもかなりの被害を受けた。日本では東海村の原発事故が発生し、これまた日本の安全神話が崩れた年だった。原子力の先端技術とバケツの手作業との異常な取り合わせ。相変わらずの開発・略奪志向による環境破壊・地球環境問題、はては地域戦争・環境難民などの続出。われわれ人類の先見性の無さによる2000年問題におびえたのも、自業自得であろう。地球全体が世紀末の異常さを多分に示しながら、新しい世紀へと雪崩れこんでいく象徴的な世紀末症候群の出現した年。それがこの1年であった、と思う。

ノストラダムスの予言はあたらなかったとはいえ、人口爆発・環境ホルモンの影響など、ヒト科ヒト属の行くてにはさまざまな暗雲がたちこめている。新潟県巻町原発や徳島市の吉野川移動堰建設に関する住民投票などのボトム・アップ的志向がなかなか進展しないのはどうしたことか。まさに、自然現象とともに社会現象も大変動期である。行き先の見えぬ大変動期を乗り切るための智慧を、いかにフィールドから編み出していくのか。今年の課題は、それである。それを、歩きながら考えていきたい。

なぜ日本では、ボトム・アップ方式がうまく働かないのか。なぜかなしいこと、だ。滋賀県は自称「環境優良・先進・熱心県」とのことだが、びわこ空港問題などに、どうして智慧が働かないのだろうか。これまた、滋賀県自称の「ユニークな(?)滋賀県立大学」ではあるが、予算・人員ともども「ユニークな(?)大学」とはほど遠い現実である。ともかくにも、学生たちが主体的に育っていくのを6つの部活顧問の経験をもとに見つめていきたい。これが、ぼくが行なえる当面のボトム・アップ手法であるかもしれぬ。

三田村 緒佐武

湖沼環境実験施設から眺める琵琶湖は、春霞みが神秘的な小湖のごとく対岸を隠し、盛夏の静けさと稲妻は黒々と湖面を輝かせ、秋の天空の群青はその色を水に映し、厳冬の鉛色の北風は大海のごとく荒れ狂

わせる。日々異なった琵琶湖の顔は、環境復元のための信号を発しているようでもあり、私にとってよき師だ。また、人の生き方を単一化させる昨今の世相への警鐘にも感じられてならない。1999年は、そのシグナルに向き合っ、琵琶湖環境のあり方と私自身の生き方を自問し続けることができた年であった。

近 雅 博

新熱帯区へ

1999年10月に初めてブラジルに行った。これは私にとって初めての新熱帯区訪問である。アマゾン河の中流にある熱帯雨林の奥のフィールド・ステーションに行きクロツヤムシという昆虫の調査をおこなってきた。このフィールド・ステーションはアメリカのスミソニアン研究所とブラジルのアマゾン研究所が共同でおこなっている熱帯雨林の断片化が生物多様性にどのように影響するか調べる研究のステーションのうちもっともよく森の残っている場所にあるものである。クロツヤムシだけを見ていると私が見なれている日本やバルネオのものと同じように林床の倒木の中で生活していた（ブラジルのクロツヤムシは東洋区のものとは6000年以上前に共通祖先から分かれたと考えられるのだが）。ただし、森の中に開かれたキャンプ地には、青い金属光沢のある翅をもつモルフォチョウやまるでジェット機の轟音のような鳴き声をあげるホエザルの群れがやってきて、新熱帯区の森にいるということを実感させてくれた。

倉 茂 好 匡

1999年7月、小生を発明人とする特許出願を生まれて初めて行った。「河床堆積物の層厚が洪水中にどのように変化するかをモニタリングするためのセンサー」に関する発明である。もっとも、これが特許として認められるか否かが判るのは数年後のことである。

ところで、この発明は小生の研究活動に付随して成されたものであるから、「職務発明」とみなしうるものである。一般的にはこのような場合、大学の発明規定に照らして「職務発明か否か」を判断し、その後の対応をすすめるのだそうである。ところが、本学には「発明規定」がまだなく、それどころか「県自身が発明に関する規定をまだ持っていない」とのこと。また、大学としても特許出願などをしたことはまだない状況だったそうである。悪いことに、このセンサーを開発する際に少々知恵を貸してくれた企業は「不況で金銭的にしんどく、特許出願に関する費用を出せない。また特許をとったとしても、それでなんぼ儲かるかが判らない以上、とても金は出せない」というつれない返事。だから、「発明規定がないのをいいことにして、どこかから特許出願をする」道も閉ざされてしまった。残された道は、小生がポケットマネーで出願するか、なんとか県特許として出願してもらうか、2つに1つである。

特許出願にはけっこう金がかかる。自分で書類をそろえて出願したとしても、審査を受けるだけでも10万円を越える額が必要である。もし出願届け等を弁理士さんに書いてもらったりすれば、総額で60万円はかかるとのこと。それに、もし特許が認められたとしても、その特許を登録して占有するためには、さらにある程度の金額が毎年かかる。また、だれかに特許使用を認めたりなんだりのときには、それなりの法的手段が必要である。研究者が単独でこれらすべてを行うには「経営的才能」がないと厳しい。小生にはとても無理である。

そこで学部長や総務課の寺田さんをお願いし、県特許として出願してもらうことにした。これも「大学として初めて」の事例であるから、みなさんにかなり負担をおかけすることになった。しかも、「県の発

明規定がない」状態のことであるから、なかなかスムーズにことがすすまない。今後も、いろいろとご苦労をおかけすることになってしまったようだ。

上 野 健 一

北米で学んだ水循環研究

9月から3月まで、文部省海外在外研究補助金にてアメリカで5ヶ月、カナダで1ヶ月間の在外研究を行う機会に恵まれた。短期間ではあったが、大学研究では得られない貴重な経験をしたのでここに報告する。アメリカでの滞在先は National Oceanic and Atmospheric Administration, National Environmental Satellite, Data, and Information Service (NOAA/NESDIS) で、衛星水文研究グループにて Passive Microwave (PMW) 衛星データを用いたチベット高原周辺の降水量推定に関する研究を行った。同地域はユーラシア大陸の中でも地上観測地点が希薄であり、かつ大気陸面過程が気候変動に重要な働きを果たすと考えられている。現地でも観測された頻繁でかつ弱い強度の降水をSSM/I衛星データから如何にして推定するかが課題となった。従来適用されていた散乱指標から他のチャンネル値を差し引く事で、散乱検出に使われていた従来の検出限界を下げる事が可能である事が解った。プレモンスーンの日変化を伴う地温勾配が散乱指標に影響を及ぼしている可能性が示唆された。カナダでの滞在先は Environment Canada, Atmospheric Environment Service (EC/AES) で、寒冷地における降雪・積雪量観測を行っているグループにて降水量補正及び積雪観測に関する研修をした。降水量補正で使用する気象データの平均化の問題や、積雪水量推定にもPMWの散乱指標が使われている事など、有意な情報が得られた。

今回お世話になった部署は両方とも現業の気象・水文機関であり、研究対象が広大な北米大陸とあって、衛星・気象水文観測点のデータを最大限に利用し、役割を分担する事で効率的に研究を進めている。寒冷地の降水観測法や衛星アルゴリズムの開発は、いずれも自国の自然現象を理解するのに不可欠な課題であり、学問の発達がそれぞれの国の自然現象に深くかかわっていることを実感した。私から無理に滞在をお願いしたにもかかわらず、ほとんどの研究者の方が、客人としてではなく一研究者として率直に対応してくれたことが大変うれしい。自分の問題意識を明確にして自主的に議論に望むこと、語学ではなく仕事の内容が海外での研究生活に重要である事、を再認識した。貴重な半年の経験を大学での教育・研究生活に生かしていきたいと思う。

環境計画学科 環境社会計画専攻のこの一年

「授業をどうする」で始まり「授業をこうする」で終わった環境社会計画専攻のこの一年

環境計画専攻主任 奥野長晴

平成12年度に環境社会計画専攻は何をしたか？上記表題がその答えである。われわれは意識的に「授業・教育」を毎回専攻会議のテーマに加えて、全員がフリーに討議することを続けた。12年度からカリキュラムが大幅に改変、それにどう対応するかが最重要案件であったからである。新カリキュラムの目玉の一つとして、一年前期と後期に「表現演習」と「政策形成・施設演習」がそれぞれ配属されている。いずれも当専攻の全教員が分担することになっているので、「教育アウトプットは何か？」「その達成のために授業をどうプログラムするか」が、年度当初、専攻会議の最大の関心事項であった。一年生前期の「表現演習」では、教員一人が平均8名の学生を受け持ち、「大学は何をする所か」から始まり、「大学での勉強の仕方」、「レポート作成の要領」、そして「プレゼンテーションの方法」に至るまでを、手取り足取り式に、小人数ゼミを通じてみっちり教えることを予定している。当専攻の専門教育が意図するものは既存の知識の詰め込みではない。学生自ら何かを発見し、そしてそれを発信してはじめて教育が完成する。これは高校教育と明確な一線を画している。この間のギャップは大きく、この調整にしくじると、大学の授業は面白くないと早合点し、知的刺激を受けることなくそのまま4年間冬眠してしまう学生のいることが次第にわかってきた。表現演習の目的はこのギャップを埋め、大学という場へ参加の手ほどきである。「しかし何かを教えることよりもっと重要なのは学生一人ひとりを固有名詞と呼び、名前と顔の一致を通じて

彼らを知ることである」が専攻会議を通じて定めた合意事項であった。こうすれば、彼らが大学生になった早い時期から教員との人間的な交流が始まる。これにより彼らの心から孤独感が消え、そして他方、教員の気持ちの中には「手塩にかけて育てる喜び」が湧き上がってくる。

この努力の効果が早くも現れた。1年生の数名が大学院修士コースの授業を聴講し始めたのがそれである。これに加えて大学院進学準備を今から始めたいという学生が出現した。大学受験から開放され、これまでの反動から、遊びたい盛りの一年生後期に、単位も取れない授業への聴講希望、将来の進路を早々と決める。これを見て「今の若者はどうしようもない」と誰が言えるであろうか。大学入学直後の早い時期に実施するこの授業はその後の学習効果にとってきわめて意義が大きい。

新カリキュラムの第2の目玉は1年生後期に配属した「政策形成・施設演習」である。その目的は自己アイデンティティの形成にある。各教員が1週ないし2週を受け持ち、その中で、自分の専門分野の最先端を学生に易しく伝達することにより、それが彼らの進路発見の支援となることを狙っている。毎回学生はあらかじめ指示された課題に関するレポートを授業後1週間以内に提出、担当教員は添削あるいはコメントをつけて1週間以内に返却することを学生と教員双方に義務づけ、そして実行した。特筆すべきは、総まとめとして、最後に学生が自分に対するリコメンデーションをレポートにして提出する点である。すなわち、まず自分の進路を定め、それを達成するために残る3年間になすべきことを自分自身に伝えることがこの授業の最後の課題である。こうすることにより、自分の適性を見極め、それに応じた進路を見出し、それに至る方法をステップバイス

トップに決めることができたことになる。授業を徹底的に利用して自らを鍛える方法を自分で作るというわけである。これこそ究極の授業であると私は考えている。

この授業で提出する最後のレポートの課題への応答、すなわち自分に対するリコメンデーションの数例を以下に示す。

「公民の教師になって環境学を教えたい。しかし教師になるのはきわめて難しいので、その準備を今から始める」

「新聞記者になりたい。そのためには日本語を正確に書き、相手に情報をうまく伝える能力を磨く必要がある。」

「今まで文系なので、理系に苦手意識があった。しかし希望の職業につくには理系の知識が必要なのが分かった。これから理系の勉強をしたい」

「私は国際公務員になりたい。そのために語学力が必要だ。トータル600点を目標にして英語の勉強をする」

「ドイツの環境政策をもっと知りたい。そのためにドイツ語を勉強する」

「エコ対策に対応するリサイクル商品を作る職業につきたい。そのために情報収集が必要だ。コンピューターを使いこなしたい」

「JICAの仕事をしたい。専門知識と語学力の向上が必須だ。」

「シンクタンクからきた講師の話から、人前で物事を分かりやすく話す能力、専門能力、語学力、この3つががどのような職業に付く場合でも求められることがよく分かった。」

「授業を受けてみて、今まで建築をやりたかったが、家やビルなど単体を作るのではなく、町全体をつくることに興味を持つようになった。」

これらをみると、全員が何かをつかみ、自己形成の進んでいることがよく分かる。教員側がこれ

らにどう答えてゆくかがつぎの課題である。

年度の後半になると、卒業研究の指導方法が専攻会議の主要議題になってゆく。9名の教員が準備した卒論の指導方法やテーマ設定を、経験の有無や教授講師など序列とは無関係に、全員が同じレベルで相互に批判し、評価し、そして最後に一つの考え方を共有した。これは「卒論を通じて何を発見するかは重要ではない。卒論という手段を通じて、調査研究の方法を身につけ、そして勉学の喜びを体得させることがもっと重要である」に終結した。

最後に、卒論の指導の一つとして、査読システムを採用していることに触れておきたい。指導教員以外から、学生が提出した論文ごとに、査読担当者を決め、担当する卒論の修正や再提出を命じる権限を与えたのである。見方を変えると、査読を通じて、指導教員の指導能力がチェックされ、そして評価されることになる。環境社会計画専攻では、卒論指導に関して第三者評価を早々と導入したといえよう。このシステムの実施により、学生側も指導教員側も卒論に対する真剣さがひときわ深まったと考えている。

この1年間の論議を通じて「教育効果の悪さを、能力不足ややる気のなさなど、学生側に戻してはならぬ。できの悪いのは教える方の責任である」「固有名詞としての学生に関心を持つことに勝る教育はない」が環境社会計画専攻全教員共通の基本姿勢になった。

本誌の「私のこの一年」の章に全員が「授業の工夫」を、研究教育活動の章に「卒論指導からみた研究室の顔」を執筆したのは当専攻のこの一年にわたる教育的情熱の結実に他ならない。

土屋正春

論文材料のファイルがずいぶんたまった。が、発表する場がなくて困っている。開学以来なので足かけ5年の悩みだ。要するに本学には研究紀要がないことに由来している。商業雑誌の枠を越える成果発表の機会がないままなのだ。何度か訴えたのだが改善の兆しは全くない。分野が異なると審査つきの雑誌論文以外の論文の持つ意味が通じないため、同様の悩みを抱えている同僚は多い筈だ。本学発の社会科学系の研究成果が狭いはばのままでよい訳はないのだが。

そうしたこともあって、このところは専ら「参加型環境政策」の現地調査を続けている。このテーマは極め付きの意味深さを湛えているとの思いを深くするばかりだ。多分、その原因は日本社会のたたずまいに改めて触れざるを得ないがために違いない。市民とは誰のことが、行政の自覚とは何なのか、代表とは、議員とは……等々である。また同じこのテーマで次の1年が後に続くのは確かなようだ。

仁連孝昭

この1年は授業に明け暮れたというのが実感である。他大学への出講が複数重なったこと、大学院修士課程の授業が新たに加わったこと、学部新カリキュラムへの移行によって新たな授業科目が増えたことのためである。その結果、いろんなところで、多様な形態の授業を集中的に持つことができた。そのなかで感じたことはやはり、教壇にたって一方的にしゃべっているのではなく、フロアからの応答のある授業がいちばん面白いということである。大人数になるほど、学生とこちらの間の距離が大きいほど、そのような授業はできない。受講生の数はどうすることもできないが、学生とこちらの間の距離を縮めることは不可能ではない。そのひとつの方法は、授業のテーマに合わせて事前に課題を与えておき、それを発表させてから講義に入るというものである。これによって、学生が何を理解し、何を理解していないかがわかり、学生の立場に立った話ができる。もうひとつの方法は、実際に問題を与えて、それを解かせるやり方である。習った知識や理論で問題を解いてみることによって、それをどこまで理解しているか客観化でき、教える側と学ぶ側との間の溝を埋めることに役立つ。

ともあれ、学生とこちらとの間にある距離をいかに取りのぞき、対話型の授業を進めることの重要性を痛感した1年であった。

秋山道雄

以前から、1年前期に配置された「地域調査法」では、早い段階で木下是雄著『レポートのまとめ方』（筑摩学芸文庫）をみせ、レポートを書く際には、これをまず読んでからとりかかるようにと伝えてきた。夏休みにはそれを実践するためにレポートを課してきたが、休暇明けにできたものをみると、その形式と内容の両面において同書を読んでまとめたとは思えないものに接することもまれではない。

今年度から新しく始まった「表現演習」では、ゼミ形式ということもあって対象の学生が5名であったから、レポートの作成プロセスと文章表現を学ぶため、同書を活用することにした。

まず、全体を分割して5名に割り当てる。各学生は担当の章を読んでレジュメをつくり、1章の担当者から順に報告していく。ひとつの報告が終わったところで、こちらからいくつか質問をする。前後して、他の学生にも不明な点を尋ねるように勤めている。こうした相互作用が、読みを深めるきっかけになるこ

とを期待してのことである。

読後感を聞いてみると、レポートのまとめ方がこんな手順をふむとは知らなかったという答えが返ってきた。このあたりが、ひとつのポイントだろう。レポートを書く前に、レポート作成に関する基本的な文献を読んでおくことが望ましいが、表現演習は少人数であるがゆえにそれを行なうきっかけを提供することになった。

その後は、環境に関連する新書本をこちらが提示し、そのうちの幾冊かを学生が選択する。時間の許す限り、前と同じ形式で読み進めていく。今年度は、2冊読んだところで前期が終わった。

末石 富太郎

聴衆630人／年報第3号に収録分以後の講演記録を残す。この1年の件数は例年より少なく約1／3であった。下表以外に、建設技術協会依頼の「市民運動への対応」という講演原稿まで出したのに、内容に恐れをなしたかキャンセルになった場合もある。

年月日	演 題	主催・場所	対 象	経 緯*	反 応	自己評価
98.12.02 ~12.27	市民活動からみた環境問題の将来（吹田ケーブルTV）	千里リサイクルプラザ	SUTV加入一般市民	98.12.12の録画	不明	講演の身振りなど良し
99.04.27	持続的流域管理へのプロセスデザイン（環境への視点を学ぶ会・基調講演）	長命寺湾 西の湖流域協議会/八幡市福祉C	協議会員約100人	川端市長依頼	質問は的はずれ	被動員集団への啓発法
07.23	環境・都市・大学・市民（京都東Rotary Club卓話）	京都都ホテル	Club員約100人	企画者が友人	熱心だが質問なし	30分の卓話の難しさ
09.03	Storm drain, Sys. innovation with revised literacy・・・	8ICUSD/Sydney,Hilton	約40人	応募・審査パス	注目を集めた自信	原稿なし 英語OK
09.21	まちづくりと環境デザイン（99年度地方シンクタンク協議会、第14研発、基調）	滋賀総研ピアザ淡海	近畿地区約150人	主催者依頼	特になし	特になし
10.10	エントロピー最小社会への回帰は可能か（学会第17回シンポ、基調講演）	エントロピー学会 中京大学	大学人・一般約100人	主催者依頼	反原発多数で熱気	事後質問も多 く収穫大
11.13	複雑系の行方（社会・経済システム学会・初代会長山口昌哉追悼パネル）	同左学会 法政大多摩	学会員約50人	現会長の氏名	他登壇者は無追悼	社会学ボス詣を批判
12.04	環境・都市・大学・市民（淡海生涯力レヅジ理論学習講座）	県生涯学習課・県大内	市民約50人	学内調整	暗くすると寝る人	引き込んだ自信あり
00.01.27	材料の環境負荷低減への提言 - 社会金属学の提唱から18年（日本金属学会セミナー）	住金本社講堂（東京）	会員+学生約50人	A、B	面白かったと好評	論旨逸脱の悪い癖多発

*) 出講を要請された主な理由 / A : 筆者の講演を主催者が聴いた、 B : 主催者が広義の元ゼミ生。

奥野長晴

水環境システムの授業では6回レポートを課し、それを克明に添削して提出の次週には返却することを試みた。学生の書いた文字より私の赤字の方が多いレポートもある。こんなことは教員にとって楽な仕事ではない、しかも無限の時間が必要だ。しかしその効果は絶大である。学生の所属は環境社会計画、環境建築デザイン、生態、資源など、それぞれ学科を異にするが、異口同音、レポート作成について、つぎのように評価してくれたのである：

「レポートを採点してもらっただけで十分この授業に出る価値がある」

「自分で考え、それを文字にして、他人に伝える訓練は今回が初めてである。その難しさとコツがわかった」

「毎回レポート課題をこなしているうちに、授業に積極的に参加している気分になった」
 「書くことにより知識が整理され、自分の物になることが分かった」
 「レポートが毎回返却されるので、どこが悪かったかが確認でき、また評価がつくので下調べなども細かくするようになりました。今まではいいかげんに書いていました。他の授業でもレポートを返却してほしいです」
 「読み手を説得できるような書き方を心がけるようになった」
 「長いレポートでも先生がきちんと全部みてくれることや、内容だけではなく、文章の書き方までていねいに見てくれることを下級生に教えたら、この授業を受けたい人はたくさんいるだろう」
 「2単位の授業としては学生の負担が大き過ぎる。しかし得るものは大きい」
 授業だけに明け暮れたのが私のこの1年であった。その結果得た結論が「細かい手先の技巧は必要ない。授業のよしあしは教員がどれだけそれに時間を割いたかで決まる」である。

石川 義紀

4年間の約束で引き受けた某私学の非常勤講師の役目がやっと終わった。私学という性格からか、講義の学生数がやたらと多かった。しかし、多いことは必ずしも悪いことばかりではない。学生数が多いとピンからキリまでいろいろと居る感じになる。聴く学生は聴いていると割り切れば、学生の多さはさほど気にならない。これは、本学と私学の両方を経験してよくわかった。受講する学生は同じ3回生、同じ講義内容で同じ講義資料、私学での講義の翌日が本学の講義だったので、両方の大学の差がよくわかった。
 大勢の学生の注意を引くにはどうすればよいか、それは黙っていることだということもわかった。黙って立っていると、学生はその異常さ？に気がついて見事に静まり、教壇に注目する。しかし、再び講義を始めると、平常に戻ったという安心感からか、ざわざわが始まるが、それでも少しはましになるようである。
 もう一つ面白い現象に気がついた。試験をどういう方式にするかで学生の賛否をとると、「持ち込みなし・試験問題予告あり」方式のほうが「持ち込み自由・試験問題予告なし」方式よりもわずかに支持率が高い。これは、私学でも本学でも同じであった。本学では複数の科目について賛否をとってみたが、結果は同じであった。
 大勢を相手にするほうが何となく安心感がある。小人数のほうが緊張感がある、というのは奇妙に聞こえるかもしれない。

井手 慎司

以下、1999年を振り返って順不同で思いつくままに...

2月、3月には環境生態学科の荻野先生の仕事でマレーシア、タイ、ベトナム、インドネシアの4カ国を、各国のインターネット事情を調査するために回った。国境のないインターネットといっても、まだまだインフラ整備の遅れている国はいくらでもあることを実感する。
 タイをのぞけば初めて行った東南アジア諸国、楽しくもあったが、仕上げのレポート作成にいまだに苦しんでいる。それにしてもハノイでの通信費のパカ高さには驚いた。たった2、3本の国際電話で宿泊費を軽く超す請求書突きつけられるとは、少々ばられたのではあるまいか。
 昨年度（'98）の大学院試験はゼミ生が全滅、今年9月の院入試も続けて失敗した学生が。今年のゼミ

生のなかには受かった学生もいるのだが、結局、わが研究室では来年度も院生がいない状態がつづく。気楽なようでもあり、さみしいようでもあり。

5月はデンマークの世界湖沼会議に出席した。おもに日本から参加されていた市民のみなさんのお世話を仰せつかったのだが、これが年末の「湖沼会議市民ネット」の設立へとつながっていく。現在、せっせと縁の下の力持ち作業に勤しんでいる。どうせ乗りかかった舟、2001年のびわ湖での世界湖沼会議にむけてサイは投げられた。子供たちの未来のための"社会実験"が始まったと自分に言い聞かせている。

いくつものシンポジウムの司会や講演会、はたまた BBC の「朝までバンバン '99」とよく露出した1年だった。それにしてもあの TV ディレクター、司会者にむけての指示とはいえ、私の話はこむずかしい、もっとイージーな話題に変えろとは失礼な奴め。

後期は立命の非常勤まで受けてしまった。いかに断りにくい筋からの話だったとはいえ、もう少し仕事を選んでもいいのではないか。特に10月、11月、吹田の4週連続の講演会と重なった時期には死ぬかと思った。よく身体がもったものだ。もっとも、4回生につきあわされた卒論の締め切り間際にはついにインフルエンザでダウンしてしまった。ひさびさに39度まで熱があがり、体力が快復するまでに数週間かかった。来年は、もっと早めに卒論原稿を出させようと心の中に誓うのだった。そうでないと私の身体がもたない。

金谷 健

今年の授業での主な工夫を以下にまとめる。

表現演習（1年前期専攻必修）：新規科目。A 4二枚程度のレポートを多数書かせた。手書き不可とした。テ-マは、大学生活で得たいこと、10年後の私、環境問題（2回）、社会問題（2回）、両親の20歳の頃（インタビュー-）。発表・討議し、レポート添削し再提出させた。入学したての1年生にはかなり大変だったが、最終週になると、レポート作成が苦にならなくなったとのことである。
 環境統計学（2年後期学科必修）：カリキュラム改訂により、今年度は学部必修から学科必修となった。人数が半分になったので、レポートを少し増やしても大丈夫（私にとって）だろうと考えたのが甘かった。昨年までは、3回だったのが、結果的に8回になり、チェックに多大の時間を費やし、昨年より大変であった。その苦勞が報われるかどうかは、明日の試験で判明。なお最終週に無記名で実施した授業評価は、平均77点であった。

廃棄物管理論（3年後期専攻選択）：最終週に総合討議を行った。テ-マは「10年後に一番深刻な廃棄物問題を一つ設定し、内容・解決策を考えよ」である（前週に宿題として課しておいた）。出てきた問題を黒板にまとめ、解決策を提案学生に答えさせ、金谷がコメントしてまとめた。出席学生20数名ということもあり、1回の授業でうまくおさまり、その後無記名で実施した授業評価でも、「来年も是非実施、できれば2回」と好評だった。

合意形成技法演習（3年前期専攻必修）：学部報第2号の「私の授業」で述べたように、学生からの授業評価で「他グループ発表を聴いている時間が退屈」との指摘を受けた。そこで昨年度から、発表中に他グループへの評価を書かせ（用紙配布）、後日それらを整理して学生に配布した。自分たちの発表への友人たちの評価がわかるようにした。

環境計画学科

環境・建築デザイン専攻この1年

環境・建築デザイン専攻の1年間を振り返って

環境・建築デザイン専攻主任 藤原 悌三

< 人事異動 >

平成11年3月、建築デザイン専攻の濱田五郎先生が定年でご退官になりました。先生は昭和38年(1963)から本学の前身である滋賀県立短期大学に奉職され開学の時期の4年間を加えすと36年間建築計画、建築設計の教育・研究に従事してこられました。多くの卒業生にとって思いで深い先生であったかと存じます。どうもありがとうございました。代わって、4月には松岡拓公雄先生に同専攻の助教授として来て頂くことになり、現在学部ではイメージ表現法と建築計画の講義を担当されていますが、講義だけでなく設計演習にもたびたび演習室に顔をだされて適格な指導をしておられるようで、学生の人気も抜群の教育者かつ優秀なデザイナーです。五十嵐敬喜先生には非常勤講師として3年間建築法規をご担当頂きました。長らくありがとうございました。代わって平成12年度は卯田隆一先生をお願いしています。今年度限りでしたが、環境行動論の非常勤講師を京工大の森田孝夫先生をお願いしました。ありがとうございました。

< 新カリキュラム >

本学も開学から4年経ち、今年度から新しいカリキュラムがスタートしました。主要な変更点は、1)旧カリキュラムの補填、2)設計演習の見なおし、であり、建築デザインの基礎を理解するための「建築デザイン概論」、建築材料・部材について解説する「建築一般構造」と給排水・空調設備に関する「環境設備」の各教科が増設された他、科目名や内容の変更修正がありました。また、設計演習については、これまで各教員が個別に指導

してきた内容を、より充実させるために、設計教育のプロセスに応じた指導体制をとり、最終段階でスタデオ制を導入することにしました。3回生後期にセミナーを導入したのもスタデオ制を具体化する一つの方法です。最近教育の国際化が議論されています。環境・建築デザイン専攻で育てたい人物像を見極めた教育を実施するための真剣な議論が今後必要になります。

< 大学院の設置 >

平成11年4月には環境科学研究科(修士課程)が設置され、環境意匠学専攻には14名の大学院生が入学しました。建築系の大学院の講義はデザイン・計画系が6講義で構造系が1講義というカリキュラムになっているため、私たちの研究室の学生には工学研究科の講義もとるように指導しています。個人的には修士課程2年の経過後はカリキュラムの見なおしが必要であろうと思っています。大学院の指導体制には、主指導教員と複数の副指導教員からなるコミティー制をとっていますが、うまく機能するかどうかは、次年度の修士論文の内容で評価されることとなります。いずれにせよ学生諸君には学部とは異なる高度な研究を進めていただきたいものです。次々年度にはさらに博士課程の設置が予定されています。環境科学研究科にどのような博士(環境科学)が誕生するか楽しみです。教員も真価を問われることになりそうです。

< 卒業研究 >

学年末を迎え、4回生は卒業論文・卒業制作の完成に向けて忙しい毎日を過ごしたことと思いますが、設計演習室にもう一つ活気が見られなかったのは物足りない限りです。下宿で制作に熱中していたことを期待しますが、学生の自主性を尊重するというのは習わない、教えないではなく、学生の発想を尊重しつつ充実した指導により社会で

活躍できる学生を育てることであり、専門によって考え方は異なりますが、指導の方法については、絶えずより良い方法を模索していく必要があるでしょう。ともあれ、今年度は建築系50人の4回生の内、35名が卒業制作、10名が卒業論文を提出し、2月14、15、16日の3日間交流センターにて展示・発表を行いました。卒業制作はパネル6枚以上と模型などを展示し、その成果について教員と学生との公開の討論の場をもちました。一方、卒業論文はOHPやPower Point、パネルなどにより各自15分の発表を行い、先生方から質疑を受けました。冬風の厳しい今日この頃の建築界だけに、卒業論文も卒業制作も厳しく評価することが、本人はもとより、教員にとっても、後輩にとっても必要ではないかという判断からです。2月17日の環境・建築デザイン専攻会議で卒業研究からEA(Environmental Architect)賞、優秀賞、奨励賞を選定しました。高橋万里江さんには論文「都市における祠の領域性」と制作「Hand Shaking Home」に対してEA賞を贈ることが決まりました。また、優秀賞には「滋賀県内における地震被害予測に関する基礎的研究」の論文発表を行った森井雄史君が選ばれました。奨励賞には論文と制作を発表した中田由紀さん、館克典君、餅修司君、門間香奈子さん、田中大輔君、中倉伸顕・渡辺樹両君が選ばれました。岡田亜依さん、根来秀晴君、元木輝実さんも候補にあがりましたが、惜しくも見送られました。来年は選定に苦慮するほど全員がレベルの高い卒業研究を完成してくれることを期待しています。

< 就職状況 >

最後に今年度の就職状況について述べておきます。建築デザインの4回生の就職希望者26名のうち現在までに内定している学生は17名で、就職先は自治体、工務店、設計事務所、ハウスメーカー

などです。1997年入学の学生は間もなく就職のことを考えなくてはなりません。就職試験ではまずSPIテストという適性検査があり、これをクリアしないと専門の試験が受けられない企業が増えているようです。この時点で落ちてくる学生が多いと聞いていますので、予め準備をしておくことが必要でしょう。広い視野にたつ建築デザインを志向するには3回生までにしっかりとテクノロジーをマスターすることが必要でしょう。

追記

長年、環境行動論の講義をお願いしてきました、京都工芸繊維大学教授 材野博司先生が、平成12年2月29日に御逝去されました。これまでのご貢献に深謝しますとともに心からご冥福をお祈り申し上げます。

なお、平成12年度の講義は、引き続き森田孝夫先生をお願いすることになりました。

内 井 昭 蔵

私達の専攻は環境意匠学であるが、その中心には「建築」があることはいうまでもない。しかしこれまで学生に接してきて気になることは、「もの」に対する興味が薄くなっていることだ。たしかに環境として「建築」を捉えるということは、従来の「もの」としての「建築」にのみ目を注いできた工学の「建築」とは異なるものだ。しかし、私達は「もの」としての建築から目をそらしてはならない。「建築」をつくること、デザインをすることは、私達に課せられた使命である。環境とは「自然」と「建築」、**「建築」と「人間」、**「人間」と「自然」といった相互関係に着目することであるが、ややもすれば関係という抽象的な面のみ気がとられ「建築」という「もの」にこだわる面が稀薄になっているように思う。「建築」は人間の生活を支え、守ることが目的だが、それだけではない。建築はクリエイティブなものでなければならぬ。クリエイティブリティは抽象的思考からは生まれない。「もの」に目を向けることから始めなければ環境意匠学は成り立たない。私はこの1年間「もの」にこだわるのが如何に大切であるかということを行動で示してきたつもりだ。

奥 貫 隆

都市景観フィールドワーク

1999年8月、都市のランドマーク景観の保全をテーマにロンドン（Strategic View）及びパリ（Le Fuseaux De Protection Generale Du Site Du Paris）の景観フィールドワークを実施した。ロンドンでは、St.Paul' Cathedral のドームに対する眺望景観を保全するための高さ規制及び背景規制の効果の検証を目的として、グリニッジ・パーク、プリムローズ・ヒルなどの眺望地点に立ち、撮影を行った。パリでは、都市計画（POS）に基づく景観規制図を片手に、15か所の規制地点に立ち、都市におけるランドマーク景観保全の目的と効果を確認した。

これからの都市景観の規制、誘導は、土地利用をベースとする二次元コントロールから、都市のスカイラインやランドマークの保全と創出を目的とする三次元コントロールに移行していくと見ている。

中世都市ブルージュ

ロンドン、パリの都市景観調査を終え、ベルギーの州都ブルージュを訪れた。13～15世紀、商業都市として栄え、優れた建築、芸術、文化を現代に継承する中世都市である。現在、ヨーロッパ有数の歴史都市として脚光を浴びるブルージュの街並みであるが、実は、経済の衰退とともに往時の面影を失い、20世紀中頃には旧市街のスラム化が問題となった。こうした事態に1965年、市民団体が立ち上がった。1971年、市当局は都市公共事業局を中心に、街並み再生の基本計画を作成し、ブルージュの美しい街並みが蘇った。駐車場化した広場は、新たな交通規制によって本来の姿に戻った。

訪れた3日間、街は、ブルージュの生んだ詩人 Guido Gezelle の没後100年祭で、賑わっていた。ブルグ広場、マルクト広場は、バラの花びらと植物（フラワーカーペット）で装飾され、華やいでいた。1892年、フランスの詩人J. ローデンバッハが描いた「死都ブルージュ」の深い郷愁と厳しい戒律に包まれた灰色の街のイメージはかき消され、住む人々の誇りが伝わってくる美しい街並みであった。

次に訪れるときは、1904年、写真家フェルナン・クノッフが当時のブルージュの街並みを撮影した地点を探して、同一場所で比較撮影してみようと考えている。

石 田 潤一郎

1999年の前半は、なんだかやたらと旅行していた。滋賀県文化財保護課の委託で県下の近代化遺産（建造物・土木構築物・産業機械などなど）の調査にたずさわって、発電所の廃墟だとか閉山した鉱山だとか、ずいぶん回った。日本建築学会の機関誌の編集委員も仰せつかっていて、「二十世紀を決めた書物」「二十世紀を決めた建築」といったミレニアムものの企画を3本も担当した。東京日帰りが何度もあって疲れた。

夏休みには一念発起してヨーロッパを3週間ほど回ってきた。よくある建築見学ツアーだったのだが、それでも連日歩きづめで疲労困憊した。なにしろ夜の9時過ぎまで明るいのでつい駆け巡ってしまう。足首が腫れてうずいた。でもまた行きたい。でも先立つものが……………。

一年の後半は、それはもう寝不足の日々だった。上述の近代化遺産調査の報告書作成に加えて『長浜市史第4巻』、10年来の懸案の『総覧・日本の建築 滋賀・京都』と原稿が山積。11月から2000年1月あたりは塗炭の苦しみだった。むやみな筆債をこしらえたわたしがバカだった。大学院の講義もはじまって、臨界状態。“青い光”が見えっぱなしだった。2月になってようやく人心地がついた。2000年度はこんなティーチャー・オン・ザ・ラン状態に陥らないよう、身を処さねば。

1999年の成果は『聞き書き関西の建築』（4月、相模書房、共著）、『建築MAP大阪／神戸』（6月、TOTO出版、共著）前記の『総覧・日本の建築』（2000年2月、新建築社、共編著）、『滋賀県近代化遺産調査報告書』と『長浜市史第4巻』は2000年3月刊行予定。

杉 元 葉 子

1999年私のトピックスから…

フィレンツェ

ルネサンスという魅力的な時代が生んだ空間をもう一度確認したくて、春にフィレンツェに2週間ほど滞在した。あわせてトスカナの都市をいくつか訪問したが、その際シーズン前だったが幸運にもピストリアの<ゴリの庭>をみる事ができた。古い館が残る森に覆われた広大な自然の庭にサイトスペシフィックな現代アート作品が集められていることで知られ、個人コレクションであるが一般の希望者にも開かれる。現代アートはますます現実の空間へ進出してきているが、建築の側からその意味を的確に捉えた動きが見えてこないように思う。今後の課題として興味深い。

JIA（日本建築家協会）近畿支部大会 オープンジュリー学生コンペ

JIA近畿支部大会ハートフルフェスタ '99の一環として「環」というテーマで学生コンペが行われ、本学からは院生の内田知美が卒業制作を下敷きにした「rounding along the river」という作品で参加し最優秀賞を得た。審査は、JIAの審査員だけでなく各応募作品の指導教員も審査員団に加わり、学生の作品説明から全ての討議までを公開で行う実験的な形で行われ、多様な建築的スタンス、多様な視点からの真摯な議論は、学生にとっても指導教員として参加した私にとっても刺激的なものであった。後日の評に「新たな相互信頼のきっかけであり、批評し合うことがマナーである時代へ向けた一歩」であったという表現もあったが、建築教育の根底への貴重な問いかけとして受け止めた。

迫田正美

本年は以前より計画していた集落空間構造に関する研究をスタートした。琵琶湖研究所の委託研究への参加がきっかけであったが、まず手始めに琵琶湖湖岸域の空間構造変容について調査し、来年度は草津川付け替えによる周辺住民の空間意識の変容を追跡したいと考えている。

轟 慎一

- 琵琶湖周辺における空間変容構造と環境連関システムの地域学的研究，平成10年度琵琶湖研究所委託研究報告書「琵琶湖湖辺域の土地利用に関する研究」
- 主体と環境の地域学～山形県金山町のまちづくりにおける連関システムの研究～，1999年度日本建築学会大会（中国）都市計画部門研究協議会資料
- 滋賀県守山市における環境共生まちづくりと地域生活空間（共著），1999年度日本建築学会大会（中国）都市計画部門研究協議会資料
- 環境政策研究会「琵琶湖湖辺域の土地利用に関する研究」
- 滋賀県ふるさと・水と土保全対策委員
- 淡海ネットワークセンターNPO活動アドバイザー
- 政策分析手法研究会「南湖湖岸域にみる集落空間構造と環境イメージ形成」(報告・共)
- 彦根市環境審議会専門委員（環境基本計画策定部会）
- 八日市市新総合計画策定第1回シンボルプロジェクトチーム合同会議「まちに物語をつくる～地域像のパスベクティブ～」(基調講演)
- 琵琶湖ゼミ合宿99（名城大学・平安女学院短期大学・滋賀県立大学）
- 国際シンポジウム「足元から考える環境共生のまちづくり～ドイツの例から学ぶ～」(実行委員会)
- 1999年度日本建築学会大会（中国）都市計画部門研究協議会「環境共生時代の都市・地域計画～自治体空間計画における到達点と課題～」(実行委員会)
- 彦根の緑のまちづくりを考える懇話会委員
- 第4次伊吹町総合発展計画策定委員会自然環境部会講演（学習会）「計画の構想力～都市政策システムのインテグレーション～」

林 昭男

1999年は、日本学術振興会の短期招へい研究者 Ekhart Hahn の来日（2 / 15）から始まった。彼と私との間ではすでにその半年前に、研究協力の約束が書面で交わされていた。テーマは、「エコロジカル建築に関する東西の比較」ということであるが、予想以上に早く彼の来日が実現したのはよかった。4 / 15 離日するまで、日本各地を精力的に廻った。4 / 27・28の両日、交流センターで、ケイ・タケイとのコラボレーションによる創作「木」を新入生歓迎公演として行った。6月になって北京での UIA 大会に参加、論文提出とワークショップに参加する。初めての北京の暑さと大気汚染に体調悪化。8月はじめ、2回目の木匠塾のサマーキャンプ、本学から10数名、総勢80名の参加があった。今年は台風の余波の悪天候に悩まされる。9月は日本建築学会、中国大会のシンポジウムにパネリストとして参加、また、第4回広島国

際シンポジウムのコーディネーターを果す。年末も近く、数年前に基本設計したカルメル会・女子修道院から招かれ、訪韓。クリスマス・イヴを雪に覆われた山合いの修道院で過ごす。年末、東京に戻り、正月3日からニューヨークへ。最近のグリーン・ビルディングとコンテンポラリー・ダンス事情を視察する。帰路、サンフランシスコで「エコロジカル・デザイン」の原著者シム・ヴァンダーリン訪問。その他、略。

藤原 悌三

研究室活動に研究の概要を書きましたので、ここではこの二年間に発表した論文リストの一部記載してこの一年の活動に替えさせていただきます。研究の内容をご理解いただければ幸いです。

発表論文

- Relation between Daily Behavior of Aged Person and Safety Control of Living Space
平成12年3月、科学研究費特定領域研究研究成果報告会2000/3/USA（藤原・福本・水原・伊丹他）
- Study on the Damage in Indoor Space and Planning of Disaster Prevention Against Strong Earthquake in Urban Region
平成12年3月、科学研究費特定領域研究研究成果報告会2000/3/USA（藤原他）
- Amplification of Sedimentary Layers and Estimation of Their Structures in Shiga Prefecture, Japan
平成12年1月、12WCEE 2000 in New Zealand（福本・藤原）
- Response Characteristics of Soil and Structures Obtained from Observation Networks
平成12年1月、12WCEE 2000 in New Zealand（藤原・福本他）
- 滋賀県における地震応答解析システムと観測結果の考察
平成11年11月、第4回都市直下地震災害総合シンポジウムpp.601-604（藤原・福本・小林・森井）
- 災害と福祉を結ぶ住宅行政に関する若干の考察
平成11年10月、第18回日本自然災害学会年次学術講演会 pp.103-104
- Earthquake Responses Obtained from Observation Network in Kyoto and Shiga Prefectures
平成11年3月、Proc. of 2nd Japan-China Joint Workshop on Prediction and Mitigation of Seismic Risk in Urban Region, Hikone, Japan pp.197-206（藤原・福本他）
- わが家の耐震安全性 - 阪神・淡路大震災に学ぶ -
平成11年2月、平成10年度滋賀県立大学移動公開講座
- 滋賀の自然と地域の防災
平成11年11月、近江生涯カレッジ第7回理論学習講座
- 京都市域の地震応答観測ネットワークと観測結果の考察
平成10年7月、日本建築学会近畿支部研究報告集,pp.185-188（藤原他）
- 耐震構造から総合防災へ
平成10年4月、京大防災研究所年報第41号A, pp.9-61

柴田 いづみ

風光明媚な琵琶湖のほとりに居るというのに、なんでこんなにあわただしいのでしょうか。人生の本来の目的とはどうあるべきかと思い悩んでしまいます。

県や近隣市町村からの委員の依頼で追われ、東京の友人達にすっかり滋賀県人になったねと言われていきます。地域に根ざした大学ですものと思っても、時間に追いつめられ、結構つらい時もありますね。講

演・シンポジウムは全国区で動いて、今年度は、沖縄から北海道まで行きました。

県の委員会で注目しているのは、「新行政システム推進委員会」です。その中の「地方分権部会」の部会長をしていますが、政治の専門で無い私が長なのも「まちづくり」時代の流れかなあなどと思っています。

授業の「コミュニティ計画」の中で、いるか設計集団の有村桂子さんと松原永季さんに、ワークショップを開いていただきました。阪神淡路大震災後の地域調査のパネルを、彦根市の中心市街地で学生が企画運営している ACT Station+Q座に展示して、学生には、銀座・登り町・橋本・花しょうぶの4つの商店街の人になってもらいロール・プレイをしました。参加して下さったまちの方が、後ろからアドバイスを下さったのが、印象的でした。

水原 渉

1) 研究活動

【本年度の前半】

9月に彦根、広島（建築学会大会時）、東京で行った3件の「環境共生のまちづくり」などに関するシンポジウムの準備と実施が大きな仕事であった。これはドイツから都市計画の研究者と行政家を招待し、参加してもらったもので、ドイツ側との連絡、資料の作成などにも労力を多く費やした。幸いなことにそれぞれ社会的関心を反映して予想を遥かに超える参加者があった。彦根ではゼミ学生の協力を得た。

【本年度の後半】

「ドイツの住環境整備の概観 - Hamburg市を中心に」(『成熟都市の住宅地改善』、日本建築学会/都市計画委員会/住環境小委員会、1999年12月4日、収録)を執筆、名古屋でこれを基にシンポジウムを行った。これは更に研究的課題として展開できそうである。

「人にやさしいまち・まちづくり - ドイツで見られる動き」((社)滋賀県建築士事務所協会『びわ湖』No.41、2000年1月、収録)を執筆した。ここでは独自のエコロジー論の展開を試みた。

「ドイツの住宅政策と社会福祉」(『世界の社会福祉 - ドイツ』、旬報社、2000年2月、収録)を執筆した。

2) 教育活動

大学院の授業が始まった。これまでに自分が執筆したものを使ったりしているが、これは自分にとってうれしいことだ。内容的にはまだ安定していない。

3) 社会活動

幾つかの行政委員会の委員などを引き受けいている。加えて本年度は滋賀県「快適住宅・淡海の住まい」アイデアコンペ審査や2件の建築プロポーザル審査など例年になく建築提案の審査が多かった。

4) 対学生活動

就職委員を担当しているが、本年度4回生の就職は昨年にも増して厳しい。幸いなことに自分のゼミの学生は全員おさまる予定である。昨年度卒業生にも就職の援助をし成功したのはうれしかった。

3回生の学生が「ゼミでデザイン系の研究室を志望しないと落ちこぼれになる気がする」と言っていたのを聞いたときは複雑な気がした。

松岡 拓公雄

今年の授業、設計演習課題以外の活動記録として...

学外活動としては通年でJIA建築家資格制度実務訓練委員会委員、一級建築士試験問題作成委員。講演会は熊本大学にてゲストクリニック及び講演会、佐藤総合設計にて講演会、京都造形芸術大学全学年講評会ゲストクリニック、大阪ランドスケープフォーラムにて講演会、YMC A東京にて講演会、新規信楽高校にて特別講義、滋賀県建築士指定講習会講師。

執筆としては「新建築」月評担当、INAX-REPORTにモダニズム建築の行方「丹下健三・二つの遺伝子」。

視察、旅行は教師と学生30名で薬師寺講堂再建現場見学、院生と信楽、能登、高松、直島など新旧の建築視察、個人では札幌モエレ沼公園視察。JIA企画のドイツ、スイス研修旅行にて最新建築60カ所視察、ギリシャ古代遺跡と世界文化遺産を尋ねて南イタリア、シシリア研修旅行。

実践面では研究対象活動の成果として救世新教大講堂起工式(津) イサムノグチガーデンミュージアムオープニング(高松) 鳥取県立フラワーパークオープニング、箱根テディベアミュージアム竣工式、お台場ビーナスフォート・メッセ・ジュ・ド・ローゼオープニング、東京渋谷美竹町集合住宅コンペ(当選) 静岡岡芸博覧会コンペ(次点) ナポリ駅前コンペ、九州大学移転計画コンペ(内井先生、三谷先生と共同)、日本橋東急跡地計画デザイナーアーキテクト選定コンペ(審査中)、神楽坂集合住宅設計コンペ(当選)、その他研究室にて院生と研究テーマをもとに住宅設計を2題(宝塚・熊本)。又、住宅で千葉県建築文化賞、ソニーのオフィスビルで第25回東京建築賞最優秀賞を受賞と1年目にしては結構忙しい日々でした。

福本 和正

この1年も、これまでに行ってきた研究のまとめと投稿等で、ひじょうに多忙で充実した1年であった。その要点を述べると、次のようになる。

以前から機会を窺っていた在来構法木造住宅の水平加力試験を実施でき、2~3興味深い事実がわかったので、「現存する藁葺き木造軸組住宅の水平強度と動的特性」として英文にまとめ、2000年5月徳島市で開催の「HAZARD 2000」に投稿したところ、査読審査の結果、採択された。

「滋賀県内の堆積層での地震動の増幅作用とその構造の評価(英文、査読審査済み)」を、2000年1/31~2/4に、ニュージーランドで開催された第12回国際地震工学会議で発表した。情報通信手段の進歩により非常に便利になったとは言え、参加費の支払や旅行手配には、かなり手間がかかった。

また1999年8月に投稿した、「壁土のせん断強度の実験的研究」は、同11月に査読審査に合格し、日本建築学会構造系論文集の2000年4月号に掲載されることになった。

以上は、本学の特別研究費や滋賀県大学等学術振興財団の助成金の援助を受けているが、現場試験を伴う研究では、専門の機械や技術を持った業者の協力が必要になり、前年度に要求した研究費が半分に減らされると、現場試験もできなくなるので、研究費の査定は、慎重にお願いしたい。

伊 丹 清

新カリキュラムがスタート、「建築数学・物理」という新しい講義が始まった。「工学系」の4教員で分担する。課題の出し方など苦慮、まだまだ不十分な内容といえる。また、滋賀文化短大（八日市市）での「設備環境学」の非常勤の講義も新たに加わり、前期も忙しくなる。

セミナー委員（学部）を担当、後期に毎月セミナーを開催することとなったため、案内チラシ（ポスターも兼ねる）の作成・配布など大変だった。

日本建築学会近畿支部環境工学部会で「環境工学における職能と教育制度」をテーマとする会合に参加する。求められるコース・プログラムや、出口としてのこの領域の実社会側の課題等、現実との大きなギャップを感じる。

日本建築学会熱環境小委員会主催の「第29回熱シンポジウム」で「開口部熱橋の計算」を発表する。同委員会の伝熱WGでの数年にわたる成果を報告するもの。これまでの開口部の熱貫流率の計算法に関する一連の研究成果をまとめる。終わって一段落しすぎる。

都市直下型地震時の高齢者の安全性をテーマとする防災系の先生方を中心とする研究グループに加わる。安全面からの災害弱者の居住環境改善と災害時対策が求められはじめている。過去に行った独居高齢者の居住環境調査を基にあらたな模索を始めている所である。

小 林 正 実

[論文] K. Uetani, M. Kobayashi, and Y. Araki: Symmetry limit theory for elastic-perfectly plastic continua in shakedown region, Journal of Mechanics and Physics of Solids (掲載決定)

[その他] 上谷宏二、見上知広、小林正実：繰り返しねじれ変形を受ける薄肉円筒管における歪の非一様化現象の解析、日本建築学会連続体の不均質・多相問題小委員会提出資料、平成12年3月

[各種委員] 日本建築学会、連続体の不均質・多相問題小委員会委員

生物資源管理学科この1年

学科のこの1年

生物資源管理学科長 矢部 勝彦

1. はじめに

平成11年4月から学科長、各種委員の交代、新1、2回生は新しいカリキュラム適用となった。また、生物資源管理学概論が1人の教員から各種研究領域から選出された数名の教員が担当に変更、専門外書講義も大講座ごとの担当が各研究領域から選出された数名の教員担当に変更され、幅広い教育体制となった。一方、学生の教育に重点をおいた学科の将来構想づくりが始められ、その成果が纏まりつつある。これは1期生を社会等に送り出すにあたり、数々の課題が提起されたことに由来する。また、国外から客員研究員を、国内からは研修生を迎えた1年が始まった。

2. 曖昧な学科理念からの脱却の試み

現在、全国の地方大学では学部の再編が2度目を迎えてその対応に追われていると聞いている。これは他大学だけの問題ではなく、わが学科でも同様である。この理由は学部名や学科名を変えたが、中身が変わっていないとか、寄せ集めの学科編成であったことなどにあったと聞いている。この結果として、学生に「君は何を大学で学んだのか」という問かけに対して、「あれもこれもと単位は修得したが、一体自分の専門は何であるのかがわからない」が返答である。これは一種の評論家養成教育とは言えないだろうか。これに対して社会の受入れ側は「評論家より幹となる専門と枝葉となる知識を持った学生を必要とする」と言うのが返答である。ここに大学側と受入れ側とのギャップ、あるいは自分をみつめることのできない学生を生み出す要因があったのではないかと考えられ

る。一方、「学生が学んだ教育とは無関係の職種への就職し、自分は一体何を学生のために教育を行ったのか」と不安を感じる教員、「大学教育が一握りの学生にとって役に立てばそれで良い」とか、あるいは「自分は講義と研究指導さえしておけば良い」と割り切る教員等様々のようである。これらのことが大学教育を歪んだものしているように思われる。

そこで、われわれの学科では開学にあたっての学科理念から再検討を始めた。その結果、どこの大学でも見られるように研究室名や抽象的、かつつけ刃的用語等が並べられていることが指摘された。そのため「どのような教育・研究体制を確立できるのだろうか」という観点から、「生物資源管理学とはどのような学問なのか、しかも環境科学部における生物資源管理学科の位置づけをどうするかなど」をそれぞれ問かけることから再出発した。そして、生物資源そのものと資源の存在する場で環境を対象にした自然科学、生物資源と環境を結びつけるシステムを対象にした社会科学を融合した理念づくりが必要であるとの意見が強かったように思われる。しかし、その内容は現在のところ、まだ完成を見ない状況にある。それでも取り掛かるべき内容として、「環境と生物資源の多様性と保全を図りながら動植物資源の開発・管理に関して生物学的視点から取り扱う」、「生物の生活の場で生起する環境関連の諸課題に関わる生物の病気や昆虫等の動物生態に関して生物学的、化学的視点から取り扱う」、「大気・水・土壌など地域資源や社会を取り巻く生活環境の改善、管理に関して物理学的、化学的視点から取り扱う」、「生物資源に関わる産業活動や社会システムのあり方に関して経済学的、政策学的、経営学的視点から取り扱う」という4本柱が示された。

3. カリキュラム再編に見られる特徴

これまでのカリキュラムの専門科目では学科中心に設定されていたと言えよう。数少ない教員を生かしきれず、単に他学部、他学科設定科目の履修が30単位以下に限られていたことによる歪が生じ、推奨科目と言う形でその場しのぎを行っていた。これが以下に述べるようにかなり改善されたのが特徴と言える。

そこで、これまでの学部共通科目を一部人間科学科目に移行し、環境科学部出身の学生となるように学部色を強く出した科目設定がなされた。また、他学科開講科目のうち2学科以上にわたり共通性がある科目は複数学科共通科目に設定された。これらの基本的改革の趣旨は教員数が少ないことを是正する意味でも、学部内での類似科目の抑制、学生の出口を考えた幹となる科目履修や枝葉がつけやすい科目履修を可能にすることなどに重点が置かれたことにある。一方、学生側は科目履修を行う場合に若干複雑になった傾向があるため説明を受ける必要があったが、対応が不十分だったのか、反省が残された。

つぎに、学科における改革では、初めに述べたように概論は各教育・研究分野からの複数教員によるオムニバス講義となった。また、実験科目はこれまでの5科目から8科目になり、経済演習は2科目とし、実験・演習科目を計10科目開講とした。しかし、学生は10科目中、4科目以上の選択必修と、以前と同じ履修科目数となった。理由は実験・演習では1クラス40人以上の教育が十分にできないことにある。さらに、専門外書講義は大講座の教員を単位にクラス分けされていたのを3クラス（各クラス約20人）とし、各クラスの講義を異分野の教員4名が担当することになった。これにより偏った外書講義が底は浅いが、より内容を豊富にしたと言えよう。

なお、これまで教員が担当する講義科目数は1～2科目であったが、これに1～2科目増加させ、2～4科目を担当してもらい、より学科における専門教育を充実させる施策が取られた。

4. 対外交流への貢献

対外的にどのようにわれわれの学科が貢献できるか、これは大学が世界に向かって開かれた状態にあるか、受入れる体制が整っているか等がキ・ポイントになると考える。これは国内はもちろん国外までも含めた対外交流を意味するであろう。

まず、海外との交流ではこれまでに、平成8年度は中国湖南省農業大学から2名、平成9年度は同大学から1名、平成10年度はブラジル国リオ・グランデ・ス・ル州政府から推薦技術者1名を客員研究員として受入れた経緯がある。今年度は中国湖南省農業大学から2名を客員研究員として受入れた。今年度の研究員の1人 徐慶国氏は長谷川助教授の指導のもと「植物資源の遺伝学等に関する研究」に携わっており、もう1人の研究員劉湘輝氏は増田助教授の指導のもと「農業経済政策及び農協等に関する研究」に携わっており、2人とも研究は3月末まで続く予定になっている。このようにわれわれの学科では、毎年1～2名の客員研究員を受入れることになるだろう。つぎに、国内との交流ではこれまで滋賀県および周辺の府県から研修生を受入れ、研究指導を行ってきている。今後とも、国内、国外を問わず客員研究員や研修生を受入れて対外的交流に学科としても積極的に取り組む姿勢である。

5. 厳しい就職戦線への挑戦

平成11年4月に1期生社会人として送り出して早くも1年が経過しようとしている。そこで、今年度の卒業予定と研究生終了予定者の68名につ

て就職内定者の動向を見てみよう。

まず、大学院進学では、京大院が2名、神大院が1名、名大院が1名、大府大院が1名、京府大院が1名、滋慶大院が4名の計10名の内定である。これを昨年度と比較すると、他大学の大学院への進学予定者は同数であるが、県立大学への院進学が4名（二次試験を残すが）と大幅に減少し、結果的に10名減少となった。つぎに、公務員は、国が2名合格で1名、国が8名合格で6名、地方上級は5名合格で4名の計11名の内定である。これを昨年度と比較すると、7名増大した。また、民間企業等については、金融関係が1名、食品の製造・小売業関係が4名、卸・小売業関係が4名、薬品製造が1名、民間の農林関係が4名、サ・ビス業関係が4名、その他が1名である。これを昨年度と比較するとほぼ同様な結果である。一方、進路先が未定の学生は28名もいる。この内訳は、留年予定者が6名、最後の大学院受験者が6名、3月に実施される公務員試験への挑戦者が4名、卒業後に進路を決めようとする者が12名である。

以上のような卒業後の進路予定結果であるが、今年度の特徴は、就職戦線が昨年度よりも厳しい状況にあったこと、いまだに自分の進路を決定できていない学生が居ること、カリキュラムが就職試験を受ける際の受験科目をサポートできていなかったために独学では対応が難しかった学生がいたことなどが反映された結果と言えよう。特に、昨年度の学生は専門職の試験を初めから諦めていたが、今年度の学生は果敢に挑戦を試みた。しかし、大多数の学生は独学の限界に阻まれたようである。一方、今年度から新しいカリキュラムが1、2回生には適用され、また、3回生は卒業に必要な単位には数えられないが、専門職を受験するために科目履修を行っていたようだ。これらの対応策の成果ができるだけ早い機会に現れることを切

に願っている。

6. おわりに

今回は、第1に学科の将来構想を教育面から模索してきたその途中経過を述べた。第2に今年度から導入された教育カリキュラムの特徴を述べた。第3にこれまでに学科の教員が関係した国際交流の経過と今年度受入れた客員研究員について紹介した。第4に4回生の就職先および進路等について昨年度の実績と比較しながら述べた。しかしながら、学科が担うべき方向性についてはようやく理念を初め、教育、研究体制を含めて確立すべき時期にきていると言う認識を共有することができた段階に止まっている。これからはより完全に近い姿を求めて行く必要性のあることを痛感した次第である。われわれ教員の陥りやすい学生不在の教育、自己満足を満たすだけの教育・研究、大学内をおろそかにした社会活動等は極力自己管理をする必要がある。一方、もて囃されて裸の王様にならないようにも気をつける必要がある。私自身は派手な言動よりも地に足のついた言動を行うよう努めたいと常日頃考えているが、安易な方向へ流れやすい自分の言動に注意をしなければならないだろう。また、組織は例え一個人が優れていても成立しないことを肝に銘じるようにしたい。

最後に、3月末には開学の準備室から学科の設立および開学後には学生部長や学科長をお努めになられ、また、学生に慕われて公私ともご尽力戴いた重永昌二教授と県立短期大学からお見えになられて学科ためにご尽力戴いた吉田十一教授が定年退職されますが、学科を代表して心から感謝申し上げます。

重永昌二

退職前の1年で、これまでの役職から解放されて時間的にも余裕が持てた1年間であった。そして年寄りの多弁は嫌われることを知りながら、授業時間など学生と接する機会に、これまでの自分の失敗談や幸運であった時の経験などを学生に伝えておこうという気になった。だからこの1年は講義の時間が楽しかった。

研究では、六倍体ライコムギ品種 Bacum とゼンコウジコムギとの雑種の後代から選抜した系統 KUBZ の穂発芽抵抗性についての栽培試験、ワルシャワの植物育種順化研究所から導入した冬型六倍体ライコムギ6品種の感温性・感光性の比較栽培試験なども行えた。

また、朝早く大学にきて、キャンパス内の雑草を見て歩き、その中にごく希な植物を見つけることを楽しみにしてきた。必ずしも新種というほどのものではないが、キャンパス内でそれまで見なかった珍しい植物に出くわすことがある。いわば侵入種である。この1年ではアゼナルコスゲ、アレチヌスビトハギ、オカトラノオ、カラスウリ、コマツヨイグサ、ヒルザキツキミソウなどがこれであった。これらが造園業者の定期的な除草管理によって消滅するか、それとも生き延びるのが私の関心の在りどころである。この習慣は雑草植生の動態をテーマにしたフィールドワークの授業にも役立った。

久馬一剛

図書情報センター長・評議員などの役職から解放されたおかげで、多年の懸案であった「熱帯土壌学」の原稿整備がかなり進捗したことを、この一年の最大の収穫であると思っている。

熱帯の土壌生成環境、熱帯土壌の分類、熱帯の台地土壌及び低地土壌の特性など、基本的な部分を第1部とし、熱帯泥炭の開発問題、熱帯林の開発と土壌、焼畑、砂漠化・塩類化など現在熱帯で問題となっている諸事象についての記述を第2部とする組み立てで、京大土壌学研究室の後輩諸氏にも多くを寄稿してもらった。出来上がればわが国で最初の「熱帯土壌学」の成書となる。

もう一つ今年力を入れていたのが「熱帯農業事典」の編集である、これは熱帯農業学会の創立40周年記念事業の一つとして進められている企画であるが、私が編集委員長をおおせつかって2年以上前から取り組んできているものである。さいわい、いろいろな分野の編集委員のご協力によって項目の選定などを終え、出版社も決まって、目下多くの人に執筆を依頼中である。

県立大学在職中の後一年で、熱帯に関する上の2冊の本を出版にまでもっていくことを、新しい年度における私の最大の課題としている。

西尾敏彦

1994年8月「健やかな生活と美しい環境を創る園芸」をメインテーマとして第24回国際園芸学会議が京都で開催されたのを機に1996年園芸学会近畿支部が設立された。近畿における園芸の進歩と普及を図り、会員相互の成果を密にすることを目的として、年に1回大会（研究発表会、シンポジウム等）を開催し、また、会誌を発行するとしている。大会開催は近畿2府4県で持ち回りになり、昨年は滋賀が開催幹事となり、大津において第4回園芸学会近畿支部滋賀大会が開催された。開催幹事として支部大会を開催したことは、私にとってこの1年の最も大きい、印象的な出来事であった。

滋賀県での園芸学会関係の大会開催ははじめてのことであったが、大会運営をはじめ準備から事後処理まで、県内外の関係機関の協力を得ながら、昨年9月8日に無事大会を開催することが出来た。発表課題は38、講演会は「これからの近畿の園芸を考える」をテーマに3課題あり、参加者は約140名となり、一応の成功をみたと自負している。大会の無事終了もさることながら、本学学生をはじめ県関係者の積極的な研究発表や大会参加が何よりの成果であった。

長谷川博

今年度は大学院修士の第1期生1名と4回生の専攻学生5名とともに研究に取り組んだ。テーマの基本は昨年度と変わらず、植物栄養特性の遺伝学、作物のストレス抵抗性およびヨシの遺伝的改良である。ストレス抵抗性のテーマには新たにイネのカドミウム抵抗性を加えた。イネのカドミウム抵抗性あるいは感受性を指標として、カドミウム吸収を低下させる、あるいは促進させる遺伝子を探索することが当面の目標である。植物による環境浄化、すなわちファイトレメディエーションを視野に入れた研究でもある。

今年度のわが研究室のビッグニュースはなんとといっても分子生物学的手法による実験を研究テーマに取り入れたことである。イオン吸収に関係していると思われるイネのセシウム抵抗性突然変異遺伝子を明らかにするために、ディファレンシャル・ディスプレイ（DD）法を試みた。根に発現しているmRNAをまず抽出し、それをもととして突然変異遺伝子を同定することになる。現在までに突然変異体にのみ見られるDNA断片がいくつか得られている。また、懸案であった水分条件を異にして育てたイネの¹³C含量の測定も開始することができた。来年度は硝酸還元酵素活性の測定や植物のアルカロイドの同定なども行う予定である。大学に設置されている機器をフルに利用して新しい実験に挑戦する予定である。

上田邦夫

平成11年4月より大学院修士課程が開設され、第1期生を迎えた。大学院の講義が始まり、演習も始めた。カリキュラム改正に伴い生物資源化学（2回生後期）を担当することになった。徐々に学生数が増え、授業時間が増えて大学の体裁が整ってきたが、とても忙しくなり時間の余裕がなくなってきた。

環境科学部の発足以来5年が経過したことになるが、その中で生物資源管理学科の位置づけはうまくいっていたのかと考えさせられる。特に、化学教育の立場からすると不十分と言わざるを得ない。特に化学の基礎教育が不十分と思われる。環境を考える場合、生物、化学、物理、地学などのどの分野の基礎知識も必要であるだろう。今日の高校教育のあり方と大学教育との整合性を考える必要がかなり出てきていると思われる。このような意味で生物資源化学を発足させたが、この科目一つではとうてい不十分と感ぜざるを得ない。

FW1では萩野先生とともに島緑地の環境機能を担当し、FW3では酸性雨の観測を行った。

研究室活動の内容は本学部報の研究室活動の欄に記載した。

今年度の研究は卒業研究生が伊藤彩子、太田裕子、埴村絵里、宇野淳、神田英晃、大学院修士課程1年の鈴木健夫の合計6名で行った。

各種のシンポジウムや学会に参加した。その内の一つに「マツ林の保全とマツ枯れに関する国際シンポジウム」がある。今日、滋賀県においてもマツ枯れがひどいが、この原因についてのシンポジウムであった。酸性降下物などの環境要因というよりマツ材線虫によるものとの発表が多数であった。

泉 泰 弘

1995年より熱帯の赤色酸性土壌地帯において大きな問題となっているエロージョン（土壌流亡）を効果的に抑え、持続的な作物栽培技術を確立することを目指して行ってきたインドネシアでの圃場試験が最終年度を迎えた。そこで、7月と9月にスマトラ島南部のランポン県に約20日間ずつ出張し、7月に丘陵地帯のコーヒー、9月に中位段丘地帯のダイズの根系を採取した。炎天下、しかも採取のための道具も不十分という悪条件下ではあったが、どうにか予定していたノルマを完了させることができた。得られた結果は10月に国連大学で行われた国際シンポジウムにて発表し、また最終報告書としてまとめた。さらに12月には、並行して行っていたキャッサバの根系発達に関する論文を何とか掲載にまで漕ぎ着けることができた。

その一方で、昨年と同様にイネの生育のうちで最も重要な時期に本学の水田での調査を行うことができなかったため、今年こそはと意気込んでいた定期的な根の調査については、またしても断片的なデータしか得られなかった。しかしながら、初めて指導することになった卒業研究では、（留守中に頑張ってくれた学生のお陰で）ポットや根箱を用いた栽培試験で興味深い結果を得ることができた。これをヒントとして来年の圃場試験のアイデアを練りたいと思っている。

上 町 達 也

本年度は園芸学会近畿支部の大会が滋賀県で開催され、集会幹事を務めた。また大会にて 花序形成期の温度処理がアジサイの開花に及ぼす影響 並びに 額咲き×手鞠咲きアジサイのF1における花房型の変異 について研究発表を行った。

本年度はこれまで行ってきた花器の分化に関する研究に加えて、分子生物学的手法を用いたアジサイの系統分類並びにアジサイのアルミニウム耐性についての研究にも取り組んだ。

日本アジサイ協会（会員300名程度）の例会が本年度は神戸で行われたが、そこで アジサイの花序形成 に関する講演を行った。

吉 田 十 一

研究：主な研究は、「滋賀県農林水産物名品調査」(継続)、「大津市場の商品供給圏調査」(継続)、「国際市場における農産物流通の分析」(特別研究)。研究成果はいずれも近刊の予定である。

また、ヨーロッパ農業経済学会に出席し、ポーランドの農業や野生動物研究所等を見学した。

教育：大学院発足にともない、授業担当科目が増えた。また、履修科目配当変更のためか、金曜日1時間限の市場論は、選択科目にもかかわらず、受講学生が55名に増加した。

担当科目は、農産物価格流通論、国際農産物市場論、外国書講読、生物資源経済演習、国際生物資源開発論(院)、資源経済特別演習(院)、環境フィールドワーク、。環境FW では、建築デザイン専攻の学生と大津市内の農家を訪問し、都市化地域において発生している新しい農業形態を調査した。FW では、生物資源管理学科の学生たちと観光農業を営んでいる農家を訪ね、滋賀県におけるグリーンツーリズムの成立条件を探求した。いずれも有意義であった。

矢 部 勝 彦

平成11年3月には卒業研究の指導をした7名が巣立ち、若干寂しい気分になったが、4月には研究生2名と4回生5名を迎えて新学期が始まった。まず、教育面では、新しいカリキュラムの適用と修士課程の講義も加わり、気分を一新して講義ノートも新しく作成した内容で臨んだ。研究では、これまで行ってきたテーマに新たなテーマを加えて臨んだ。また、今年度より学科長となり、会議資料づくりなど例年になく忙しい年度になりそうであった。

まず、就職では研究生を国家公務員とソフトウエア会社に、4回生を国家公務員2名、地方上級職1名、他大学大学院1名に内定させることができた。しかし、1名だけが最後の公務員試験に挑戦となり、厳しい今年度就職戦線を実感させられたこの1年であった。

講義では、土壌環境物理学と水資源保全学に水資源利用学、水資源環境論と陸面過程論が加わったが、なんとか1年を乗切ることができたように思っている。しかし、大学院生には講義の他にディベートを取り入れてみたが、ディベートでは院生に逃げられ、工夫が必要と反省させられた。

卒業研究では、造成農地における土壌物理学的肥沃度の形成プロセス解明、緑肥すきこみ後の土壌環境形成プロセス解明、負圧利用と低正圧利用による低投入型水管理技術の開発に関する研究指導を行った。その結果、学生諸君の努力により数々の貴重なデータ集積等ができた。これらの成果はいくつかの論文にまとめられるので早い機会に公表する予定である。

金 木 亮 一

【著書】地域環境水文学、共著、朝倉書店、pp.132-144（1999.9）

【論文その他】 育苗箱全量施肥が流出負荷および収量・食味に及ぼす影響、農業土木学会論文集第201号、pp.41-47（1999.6） 論文を語る 無代かき移植・育苗箱全量施肥栽培法による表面流出負荷削減効果、農業土木学会誌第67巻第4号、pp.120～121（1999.4）

【研究発表】 無代かき・育苗箱全量施肥栽培の物質収支 - 無代かき・育苗箱全量施肥栽培に関する研究 - 農業土木学会大会講演会講演要旨集、pp.360-361（1999.8） 農業土木学会京都支部研究発表会において3課題で講演（1999.11）

【パネル展示】 宇曾川フォラム '99（8月28日）

滋賀環境ビジネスメッセ '99（9月21～23日）

【講義・実験実習】 水質管理学 水理学 専門外書講読 生物資源管理学実験 環境FW 環境FW 水資源環境論（大学院）

【各種委員】 農業土木学会農村計画研究部会幹事 みずすまし構想推進委員会委員 「豊穡の郷・碧い琵琶湖創造作戦」行政連絡会議委員 「竜王南部地区」水質保全対策事業技術検討委員

新湖北地区地域用水検討委員など 「農村自然環境整備事業(ピオトープ型)池寺地区」検討委員など。

小 谷 廣 通

【論文・発表】

「育苗箱全量施肥が流出負荷および収量・食味に及ぼす影響」(共著)、農業土木学会論文集(201)

pp.73-79。 「微気象学的方法による水田からのメタンフラックスの測定」、農業土木学会大会講演会講演要旨集、pp.178-179。 「熱収支フラックス比法による物質輸送の測定について」、鳥取大学乾燥地研究センター共同研究発表会講演要旨集、pp.54-57。

【研究経過】

環境科学部圃場実験施設内水田において、微気象学的方法（フラックス比法）によって水稲植被面からのメタン放出量の測定結果を、とりあえず農業土木学会で発表した。概要は学部報第4号において述べたので省略するが、フラックス比法には問題があることがわかった。

フラックス比法と熱収支式を組み合わせれば、地表面 - 大気間の物質輸送について、比較的正確に測定でき、空間的平均値が得られ、長期連続測定が可能となりそうである。この方法を熱収支フラックス比法と名付け、農業土木学会論文集に投稿したいと考えている。

【講義】

測量学、 土壌物質移動論、 測量実習、 環境フィールドワーク 、 環境フィールドワーク 、 生物資源管理学実験 、 。

増 田 佳 昭

著書・論文

増田佳昭「第3章 食肉消費の動向と狂牛病の影響」、第6章 食肉小売構造の変化」、新山陽子・四方康行・増田佳昭・人見五郎共著『変貌するEU牛肉産業』、日本経済評論社、1999年3月

増田佳昭「第6章 プロ稲作農家の成長と農協の米事業方式」、今野聰・野見山敏雄編著『これからの農協産直』、家の光協会、2000年3月

増田佳昭「農業経営・地域農業と農協信用事業」、稲本志良・辻井博編著『農業経営発展と投資・資金問題』、富民協会、2000年2月

増田佳昭「食料・農業・農村基本法の政治過程 - 農政転換と農協農政運動の新段階」、大内力編集代表・藤谷築次編集担当『新基本法 - その方向と課題』、農林統計協会、2000年1月

増田佳昭「農林業団体・政策と地域」、地域農林経済学会編『地域農林経済研究の課題と方法』、富民協会、1999年2月

増田佳昭「プロ農家の成長と農協の米事業方式」、『協同組合経営研究月報』 No.547、1999年4月

増田佳昭「EU諸国における畜産物消費の動向」、『農業と経済』第65巻第4号、1999年3月

主な対外活動

農水省・農業生産法人制度検討会・委員

滋賀県・近江こだわり農産物発信事業推進委員会・会長

卒業研究 / 制作
